

# 文 事 叙

文選評 生先音環波沼士學

## 三等 ○ あらぬ隣

岩代賀川 眼部 貞子

女は縹緲よく生るが徳、お芳さんをご覽じる、手桶さぐるも重そなあの細腕に若旦那をまるめ込み、と言ひも終らぬに傍なる一人、ほんにつまらなきはこちとらなり、僅か二方ばかりの店販の滞りを、差配のあの禿爺めが矢のやうな催促、同じ店に住み乍ら扶持米送らるゝ人さへあるものを。でも鼻の下の長き若旦那様。米漸ぐ手にあのづから力のはいる荒々しさのとばしる水に面そむけてまた一人、てもよいさくを止められたのが大仕合の地響に棚の德利がころげ落ちて、二度まで碎いてしまひしと、芳といふ名のふとけきにほにく和毎頃より入るが如きに、柳のかげに我何んめりとも知らぬ人達のさがなき口々。口惜し、何事をあるか。誤を傳へらるゝ上からは、最早決してお世話をうくるが心苦しからざりしにはあらねど、瀕死の母の面話へば心弱かりき。いねる年、醫學士の此度大きやかな病院を建つるとて、身にはたゞ腹立しう、見やらるゝはかの廣場、地固めする頃は、母の病もやうくに慌てゝ大事なり、いかなる様か我診て遣はさんと、早よに座蒲に座りてあたりの塵を拂ひつい出すに、赤らみし面を落ちたる小櫛拾への繩後音重き。

か。分。子。父。き。を。ふ。げ。し。れ。べ。さ。う。病。か。あ。顔。も。騒。て。團。  
 に。一。と。て。の。の。は。拜。ば。し。の。て。に。い。う。の。な。や。腕。も。  
 セ。の。せ。兄。恐。あ。み。見。み。と。み。な。も。る。み。げ。し。こ。な。  
 御。め。と。ろ。つ。か。え。伏。且。急。し。ま。重。心。打。に。か。ま。き。  
 恩。て。に。し。か。す。し。ひ。つ。ぎ。得。た。き。す。ち。の。ら。恥。  
 報。臺。さ。と。は。苦。な。拜。と。は。の。ベ。惡。病。る。見。た。ん。き。か。  
 所。き。泣。せ。し。り。み。り。父。こ。き。る。の。足。戌。ま。て。し。  
 じ。に。の。だ。く。も。き。ぬ。た。心。の。と。や。し。身。音。れ。ふ。明。  
 名。を。つ。隅。母。の。た。る。得。病。の。に。人。醫。は。さ。よ。い。  
 う。く。の。れ。も。つ。そ。其。て。む。も。人。を。救。道。の。不。き。は。容。ゆ。  
 た。し。水。て。ろ。受。き。れ。明。立。折。道。の。不。き。は。容。ゆ。  
 は。た。仕。と。け。を。早。く。よ。朝。ち。か。道。の。不。き。は。容。ゆ。  
 は。る。く。わ。世。も。ざ。よ。あ。ら。ね。ば。修。々。の。間。心。に。  
 思。ざ。に。る。く。が。ば。が。醫。の。道。我。堪。は。我。お。さ。ぞ。め。  
 口。ふ。な。身。我。も。も。足。り。よ。あ。す。よ。功。徳。道。に。は。  
 惜。心。り。寄。も。心。知。繁。ま。給。き。功。徳。に。は。  
 し。は。と。り。涙。苦。り。く。ふ。功。徳。に。は。  
 山。し。と。は。し。た。母。と。ち。姿。に。は。  
 々。て。て。絶。う。ま。廣。姿。に。は。  
 か。な。な。え。ひ。病。場。を。も。暫。わ。ざ。々。も。か。は。  
 く。れ。一。き。ざ。冥。て。と。に。な。し。あ。ら。ん。も。の。ぞ。  
 て。ど。生。我。り。利。や。診。人。た。る。中。う。し。べ。る。病。た。と。仕。  
 は。を。等。き。が。た。の。ど。べ。止。と。し。に。み。ど。事。や。  
 若。い。萬。母。つ。折。ま。か。伏。け。す。知。て。ち。事。は。が。

立。い。り。な。し。べ。日。那。様。の。御。身。に。よ。も。よ。き。こと。あ。ら。じ。や。が。て。奥。様。た。る。  
 退。か。ん。か。何。處。を。さ。し。て。行。く。身。か。知。ら。ね。ど。立。い。り。ひ。ま。で。か。か。く。て。あ。ら。れ。ん。も。の。ぞ。  
 い。つ。し。か。空。は。曇。り。來。て。手。桶。の。水。に。細。か。き。波。紋。を。描。き。  
 行。未。は。い。づ。く。づ。く。彼。に。家。あ。り。あ。い。住。む。に。家。な。き。吾。が。身。を。い。か。に。せ。む。  
 (評) 取材陳套を脱し、筆致に寸分の隙なく、悠揚として迫らざる裡  
 に詩趣溢れたり、近來稀に見る好文字。

## 四 等

### ○妾の叔父さん

石狩國雨龍郡北  
龍村字和培本社

繪澤元子

妾は学校から歸つて來ると何時も裏の牛小屋へ行つて牛に草をやつたり背中をさすつてやるのが常であります、さうすると牛は喜んでモウ／＼と言ひます。  
 今日は土曜日ですから學校から早く歸つて御飯を食べから例の通り裏の牛小屋へ行つて牛に草をやつて歸つて來ると裏座敷でお父つさんの聲で、「夫れだから失販するのだ止せ／＼」